

議事録

持続可能な地域開発～農業を通じた人びとの自立～

開催日:2011年7月23日(土)

開催時間:13:30～16:30

13:30 【挨拶】 HANDS 事務局長 横田 雅史

HANDS とは hands (手)、手と手を繋いで、地域・職域・立場等を越えて連携あるいは協力をして活動していきたいという意味が込められている。また、Health and Development Service を短縮化し、HANDS と命名された。よって、健康と開発、保健を中心とした開発に関わる活動をおこなっている。

今回、わが国での東日本大震災発生に際し、東北（岩手県）での活動もおこなっているが、活動の中心は途上国であり、地域の人びとが自らの力で健康維持に参加できるようサポート、エンパワーメントし、“仕組みづくり”を支援していくことが主な活動内容である。

13:40 第1部 HANDS の活動報告

■アマゾンにおけるアグロフォレストリー～自然と共生できるコミュニティ～

HANDS プログラム・オフィサー 定森 徹

i. HANDS の紹介

HANDS は設立10年の若い組織である。医療の仕組みづくり及び人づくりを主な活動としており、私たちは現地の人びとをサポートするという立場を担っている。活動地域は、ブラジル・スーダン・ホンジュラス・エジプト・ケニア・フィリピン・大洋州・日本と全世界に及んでいる。

ii. 活動拠点の紹介

私が活動しているアマゾナス州マニコレ市という地域は、アマゾンの中でも奥地に位置し、市ではあるが九州ほどの面積を有している。一方、人口は5万人弱で1km²あたり一人と人口密度が非常に低い。主要な産業は農業であり、キャッサバ芋・スイカ・バナナなどを栽培している。また、アマゾン川では漁獲高が高く、漁業も盛んである。

市街地には約1万5千人程度の住民が居住しており、アスファルトなどで舗装され、店舗、水道、電気、銀行 ATM まであり都市化が進んでいる。市街地から少し離れると村が点在しており、約2万5千人が居住している。居住形態は高床式の建造物が主であり清潔度は保たれている状態だが、トイレや水が無いなどの衛生的問題は見られる。

市街地と村の間の移動手段は陸路がなく、航路に限られる。そして、医療機関は市街地に集中しており、村に居住している住民にとっては、保健および医療機関への移動が困難な状況である。これらの住環境と保健医療に関する現状から予防的な視点が重要だと分析し、活動に取り組んだ。

iii. 自己紹介

- ・大学では工学部電気科に在学

- ・卒業後は1年間の予定でブラジルのスラム街でボランティア活動をする予定であったが、結果として19年間ブラジルに滞在
- ・ブラジル滞在の半分は大都市のスラム街で活動
- ・主な活動内容は、ドラッグ・エイズ・アルコール・家庭崩壊・児童虐待・ストリートチルドレンの問題と多岐にわたる
- ・上記の活動を通して、「やっても、やってもきりがない」「予防が何よりも大切」と考えるようになった。そして、農村部から都市部のスラム街に流れ込んできた人たちが問題を抱えていることが多いという点に気づいた。

iv. ブラジルプロジェクト活動概要

- ・2001年 HANDS 設立直後、ブラジルプロジェクトに参画
- ・2001年～2003年：現地ニーズ調査
- ・2003年～2006年：JICA「草の根」を活動基盤とし、地域保健向上のための活動を本格化
- ・2006年～2007年：コミュニティーエンパワーメントへ活動移行
- ・2007年～2010年：アグロフォレストリー活動のための基盤作り

v. アグロフォレストリーについて

1)アグロフォレストリーとは

<主な特徴>

- ・様々な植物を一カ所で栽培する。
(これまで多くおこなわれているのは効率性を優先した一カ所での同一作物栽培である)
- ・水平的だけではなく垂直的にもスペースを利用する。(単年性だけではなく多年性の植物も栽培)
単一植物のみの栽培は疫病発生や経済の変動に大きく影響を受けやすいが、アグロフォレストリーは、環境的にも持続可能なシステムである。

2)日本文化とアグロフォレストリーの関係

アグロフォレストリーとは、アマゾン先住民の農業技術である焼畑農業と日本からの移民による里山の手法が融合、発達したようなシステムであると言える。

日本文化の中では、アグロフォレストリーは伝統的に存在しており、木場作／切替畑などと呼ばれていた。歴史上有名な人物では、上杉鷹山や二宮尊徳が長い世代にわたっての持続性を考えて植林などを奨励していた。また、江戸時代末期から明治時代にかけて老農と言われた人びとが農業研究をおこない実践、指導をおこなっていた。これらの実践は日本人の農業観に影響を与えており、これら日系移民の知恵とアマゾン先住民らに古くからあったアグロフォレストリーの原型とも言える農法が出会ってトメアスーで開花した。

3)アグロフォレストリーを実践する意義

持続可能な開発と保健ケアをあわせることで住民の生活が改善し、アマゾンの森に暮らす人々の地元で暮らしていこうという気持ちに結びつき、過疎化を防ぐという副次的効果が期待され、またこれらの人々が森と調和しながら生きることで“森の番人”となって無謀な環境破壊を阻止する役割を担うことが期待される。

4)アグロフォレストリーを实践した村人の語り

～フレッジソン氏：農業家で村の代表者～

「私は祖父の時代から続く農業家でしたが、農業をやめようと考えていました。私の祖父と父親は長年農業を営みましたが、何も残すことができませんでした。私自身も彼らと同様でしたので、農業をやめ、街に出ようと考えていました。しかし、トメアスーの研修に参加することによって考え方が変わりました。新たな技術を学ぶ機会を与えてくれた HANDS と IDEAS に感謝しています。今、私は学んだことを実践し、村の人びとや他の村の人びとにも伝えています。私は農業を“道”だと思っています。人生の道、生活を良くするための道、幸せへの道、生活状況を改善するための道。

現在、私はたくさんの苗を植えています。カカオの栽培に加えてアサイーも植えていくつもりです。それは私のためだけではなく、私たちに続く世代のためでもあります。私たちの父親たちが同様のことをおこなっていたならよりよい環境になっていたと思います。私たちの環境だけではなく、市や州や国もよくなればよいと思っています。残念ながら市や州の支援は少ないというのが現状であり、HANDS には大変感謝しています。私たちと一緒に仕事をし、サポートをしてくれている。ぜひ、私たちの市、州、連邦政府もアマゾンの農村のことを考えてほしい。そして、自然環境を破壊しない農業であるアグロフォレストリーに関心をもってほしい。これなら私たちは自然を駄目にせず生活の糧を得ることができます。これは今私たちが住んでいる地球にとっても重要なことだと考えます。多くの森はすでに破壊されてしまいました。私たちはここで農業を続けながらそれらを回復できるでしょう。そして私たちはよりよい国、より健康な国を作ることができるでしょう。」

5)アグロフォレストリーの展望

近隣の市にもアグロフォレストリーの活動を拡大し、連邦政府機関とも協力して実践していきたいと考えている。現状として、国も当活動に大変関心を示している。

2012 年以降は、3 年間の予定でアグロフォレストリー活動を中心にした栄養改善及び収入向上を目的としたプログラムを実施し、さらには連邦政府との連携を本格化し、政策の中に取り入れてもらえるような形にしていきたいと考えている。2015 年以降は、現地の NGO が自らの力で運営していくことができるよう、私たちは側面支援に移行していきたいと考えている。

■アマゾンの若者たちの未来

元 HANDS ブラジルプロジェクトインターン：矢澤 良政氏

【自己紹介】

- ・2010 年 4 月～12 月 8 か月間 ブラジル・アマゾナス州マニコレ市で活動
- ・2010 年 1 月～3 月 2 か月間 ブラジル・トメアスーで活動
- ・現在、東海大学情報理工学部コンピュータ応用工学科在学中
- ・ブラジル格闘技を通して当国に興味をもち、ブラジル日本交流協会の支援を受け、上記活動に参加

【インターン活動概要】

広報業務が主であり、ブログやツイッター、メールマガジン上で日本人学生が HANDS の活動を見たときにどのように感じるのかを分析し、日本人向けに情報発信をおこなった。加えて、日本語の報告書作成およびデータ集計等の事務補助業務をおこなっていた。また、若者によるコミュニティー参画強化活動の一環として、市街地から川を渡った遠隔地に入り、青少年グループによる活動を一緒に活性化させるという支援をおこなった。その他にも、市街地郊外にあるアグロフォレストリー実験農地で苗づくりや苗植えなどの作業をおこなった。このような活動内容から多くの同年代の若者たちとの交流をおこなうことができた。

【現地の若者について】

～マニコレ市～

シドマーサ氏（男性）

- ・ HANDS スタッフとして活動
- ・ 遠隔地の出身
- ・ 学業を修めるために市街地へ（遠隔地には大学が無いのが現状）
- ・ 現在、遠隔地の学校教員として赴任
- ・ 実兄は故郷の遠隔地でアグロフォレストリーを導入した農園を営みたいとの意思がある

ジョナタス氏（男性）

- ・ マニコレ遠隔地の農村出身
- ・ 州都であるマナウスの農業技術学校を卒業
- ・ HANDS のプロジェクトを通し、トメアスーで研修を終えた後、遠隔地の農園を巡回し、技術指導をおこなった
- ・ 遠隔地でアグロフォレストリーを実践している実兄とともにアグロフォレストリーのモデル農園作り構想に尽力

～トメアスー市～

タカギ氏（男性（日系3世））

- ・ 専門は水産業（養殖）であり都市部で修業
- ・ 現在はトメアスーに戻り、家業の農園を運営

【まとめ】

従来、親たちは子どもたちを弁護士や看護師などに育てたいという意識が強かった。また、現在でも、遠隔地の若者は市街地に出たがり、市街地の若者は都市部に出たがるという傾向にはあるが、アグロフォレストリーの活動を通して、若者によって農業が職業の選択肢の一つとして選ばれる機会も出現してきている。

若者たちとの対話によって、仕事にはどういう意味があるかを深く考えさせられた。若者たちの職業選択の条件の中には、社会的存在の意義の有無も重要な要素となっているのではないかと考えられる。

持続可能な開発というのは、地域住民の知識や知恵に直接的に働きかけなければならないので、1年などの短期スパンではなく、10～20年の長期スパンが必要になってくるのではないかと思う。

14:25 第1部 質疑応答

会場：アマゾンには貧しい地域だと思っており、労働者階級が多いと思っていたが、実際の画像を見せていただいて、大きな農場などを経営されている人たちがいることに驚いた。

定森：主に日系の人たちに多い傾向だが、大農場を営んでおり、多数の従業員を抱えている会社組織のような形態を保有している階層と、半自給自足生活を営んでいる階層の2種類ある。トメアスーでは大農園を営んでいる人たちもいるが、マニコレ市では貧しい人たちが多く居住しており、大農園を営んでいる人はいない。

会場：ウガンダでアグリフォレストリーを実践している。現在苗づくりを実践しているとのことだがこれは個人の農家単位か？

定森：集団でおこなっているケースもあるが、集団でおこなうことにより水やりなどの作業が無責任になってしまうことが多い。このような事例から個人的見解としては、個人あるいは家族単位でおこなうことがよいのではないかと考えている。

会場：苗づくりに関しては、HANDSでは種の配付や給水塔の設置などの支援をおこなっているのか？

定森：それらに加えて、技術指導や研修への同行・派遣もおこなっている。

14:30 休憩

14:40 第2部 座談会「持続可能な地域開発～農業を通じた人びとの自立～」

【各団体の活動紹介】

■公益財団法人 オイスカ

国際協力部 海外プロジェクト担当部長：長 宏行氏

世界28か国で活動しており、50年の歴史を持つ国際NGO団体。本部は日本にある。非常に大雑把に言うと、団体ミッションは、「人類が少しでも早く持続可能な社会へ移行できるよう支援すること」である。

<現在の活動概要>

①持続可能な産業（第一次産業が主）の開発

活動例：植林、マングローブ植林、珊瑚保全など

昨年度は1,080haの植林を実施

②人材育成

研修施設を設け、農業を通じて研修実施

→オイスカが理念として掲げている“持続可能な社会”のための支援とは、“ふるさとづくり”といえる。

<活動事例>

●パプアニューギニア

- ・研修施設における技術指導（稲作、養豚、養鶏など）
- ・教会を設立し、共同体づくりを支援
- ・刑務所における職業訓練（有機農法指導）

■NPO 法人 日本国際ボランティアセンター

南アフリカ現地代表・同事業担当兼任：渡辺 直子氏

<活動概要>

1980年から活動開始。アジア・アフリカ・中東9か国を活動拠点としており、日本においては、政策提言をおこなっている。

団体の歴史としては、1970年代終盤にベトナム戦争後に政情が不安定だったカンボジアとラオスからタイ国境沿いに大量の難民が流失した映像に触発された日本の若者たちが現地入りし、その後、タイで設立された。もともとは、難民キャンプにおいて衛生・栄養などの支援活動をおこなっていたが、難民は「故郷に帰る」という視点を大切に考え、「難民にならずに生きていける社会づくり」の原点にかえて、ラオスやカンボジアで活動を開始した。

活動の二本柱は、紛争地での人道支援と農村社会および都市部での持続可能な地域開発である。

<活動事例>

●南アフリカ共和国

南アフリカでは、JVC活動の二本柱のひとつである持続可能な地域開発を目的として1992年から活動をおこなっている。活動開始当初は、アパルト政策の弊害により白人依存体制および生活苦を強いられていた黒人社会への支援の一環として、都市部貧困地域におけるトイレ設置、UNHCRと共同で技術訓練、女性対象の収入向上プロジェクト、児童の就学支援、障害児に対する支援をおこなっていた。これらの活動の中心は都市部であったが、2000年度以降は、都市部だけの介入では根本的改善に結びつかないという経験を背景として、農村部における有機農業研修へと支援活動内容の主軸が移行した。

“持続可能な地域開発”という活動理念を元に、実際の農業研修においても、その土地にあるものを利用するという観点を大切にし、実践している。また、地域住民が研修で学んだ知識を実生活で活かせるよう、住民が暮らす場に研修指導者が赴いて研修をおこなっている。

これまでの活動成果としては、低予算で自給自足ならびに小規模マーケットが可能となり、その収入を生活資金として運用できるようになった。また、栄養の観点からも、野菜の摂取量が増えている。

【座談会】

進行：定森 徹(HANDS)

ゲスト：長 宏之氏（公益法人財団 オイスカ）、渡辺 直子氏(NPO 法人 日本国際ボランティアセンター)

●持続可能な地域開発と農業

定森：持続可能な地域開発と農業、住民の気づきとエンパワーメント、日本人としての国際協力の3つのテーマについて話していきたいと思う。

持続可能な地域開発という難しいことのように聞こえるが、実は難しいことではなく、先ほどの長氏の話の中から“ふるさと”という考え、渡辺氏の話にあった“収入が少なくても食物があり、生活ができて、家族と一緒に過ごすことができる時間があることの幸せ”への気づきといったことが私たちの目指している“持続可能な地域開発”に繋がっているのではないかと思うが、持続可能な地域開発における農業の位置づけに関してどのように考えているか？

長氏：地元学という地域活性化分野で活躍する吉本哲郎氏の言葉を借りると、“経済には、貨幣経済・共同する経済・自給自足の経済の3つがある”が、政府ならびに私たちは、貨幣経済で得られる収入にばかり気をとられる傾向にある。一方、農業の根源とも言える自給自足能力や助け合う能力には、目を向けられることが少ない。しかしながら、それらの能力を強化することが大切で、結果として、貨幣経済すなわち商品経済が豊かになるのではないかと考える。

渡辺氏：持続可能な社会を理念に農業を中心に活動をおこなっているが、個人的にも団体としてもその手段が農業のみであるとは考えていない。私たちが大切だと考えていることは、地域性あるいは有限な資源を有効に活用するということである。

定森：私たちの役割は、その地域で暮らす人たちが自立して発展できるよう支援することだと考えており、長氏の話にもあったように介入地域において長期的にコミットメントしていく必要がある。また、渡辺氏が述べていたように、地域に既存する資源を有効活用する工夫も重要な支援方法だと考える。

長氏：多くの公的助成金制度において長期とは、1年から3年の期間を指す。その期間において短い成果を上げることは可能であるが、その期間だけで完徹するものではなく、私たち、支援実施主体側は長期の展望をもって支援する必要があると考える。

渡辺氏：短期であれ長期であれ、プロジェクトを実施する上ではその成否にとらわれがちになるが、上手くプロジェクトが進行していない時ほどより“人として現地の方々と関わる”重要性を実感させられる。

定森：持続的な発展を支える中で、地域住民の“自主性や誇り”がキーワードとして取り上げられるのではないかと考える。

●住民の気づきとエンパワーメント

定森：途上国の住民の気づきやエンパワーメントが重要だと皆が考えているが、難しい課題である。

この難問にどのように取り組んできたのかを述べていただきたい。

長氏：オイスカの場合は、研修センターでの研修提供がメインである。他の土地での見聞は意識や行動変容に結びつきやすく、地域のリーダーを養成したいとも考えているため、インターンの受け入れなどもおこなっている。そこでは、時間を守るための規律訓練などもおこなうことで教養を深めていただき、グローバル社会にワンステップ近づける人材を養成していくという意識で取り組んでいる。

渡辺氏：JVCでは、新しいものを取り入れていくのではなく、当該地域にかつてあったものを取り戻すという活動を中心におこなっている。生活を変える中で自信をもってもらうのが目的である。また、研修参加者のモチベーション維持を目的として、経験交流を企画・実施している。

定森：場所を変えて学ぶことの効果、誇りや自主性を内面化していく中での気づきの重要性を感じた。地域のリーダーを養成する際に外部からの支援が入ることによる、ポジティブあるいはネガティブな変化についてはどうか。

渡辺氏：経験交流においては、すでに自分自身の振り返りができている段階でおこなうため、自己分析が可能となる。外部の視点は、とにかく押しつけになりがちであるため留意して支援活動を実践している。一方、自身の振り返りができていない段階で他地域の環境を垣間見ることにより、できない理由を不可抗力である自然環境などへ転嫁する心理が発生するため、外部へ導く時期の見極めが重要であると考ええる。

長氏：私たちの支援方法においては、“押しつける”ことも部分的に利用している。例えば、将来リーダーになり得る候補生に対する規律訓練などは他文化の押しつけに他ならないが、半年などのスパンで指導することで習慣化される。一方、この方法は、一般の地域住民、特に経験や知識がある高齢者層にはおこなわないといった棲み分けをおこなっている。

16:00 第2部 会場からの質問受け付け

会場：NGOの活動は丁寧である一方、スケール化していけるかどうか課題をもっているのではないかと考えているが、問題点と解決策をどのように考えているか。

渡辺氏：活動スケールが小さいことが課題であるとは考えている。しかし、持続性と活動の広がり考えた場合、数的な広がりも大切だとは思いますが時間的な広がりも重要だと考えている。限界は感じているが、JVCでは、時間的な広がり大切に活動している。

長氏：オイスカはJICA等と比較すると規模としてはやはり中小企業の域であるが、インパクトを与えること、産業創出も考慮しているので長期戦で臨んでいること、NGOひとつひとつは小さいが、連携してできることは多数あり、現在NGOと企業が連携して提言することで次元としてはマイクロであっても政府への提言もおこない、点から面の活動移行ができるよう取り組んでいる。

会場：人口爆発と食糧問題に相反して、バイオエタノールの問題があり、ブラジルにおいてはオレンジを伐採しサトウキビを栽培していると聞いたが、そのことによりオレンジが二度と栽培できなくなるのではないかと危惧する。どのように考えて行動しているか？

定森：ブラジルのアマゾン地域でもバイオ燃料としてアブラヤシの植樹が盛んにおこなわれている。しかし、牧場地だった場所でおこなわれているため、食糧生産に悪影響は与えていない。地元住民にとっては、生活を営めることが第一優先であり、地球全体の環境への意識は高くはない。一方、環境変化により影響を受けるのは住民自身でもあるため、地域の環境保全は生きていくためにも重要だと考えているのではないだろうか。

長氏：世界各国で自給自足率を上げることで飢餓や食糧難に対応できるのではないかと考えている。また、エネルギー問題にしても皆が意識を変え、アクションを起こしていけば乗り越えられると考えている。

渡辺氏：食糧問題を考える上では、数値だけではなく、質的要素も重要であり考慮する必要がある。

会場：現地で持続可能な状態に近づけていくためには長いプロセスの中で何を重要視し、注意して活動しているのか？また、常に出口戦略を考慮して行動しているのか？最後に、どのようにして身近な人に国際協力の大切さを伝えているのか？

長氏：第一に、公的資金を有効に活用するよう努めている。第二に、オイスカでは出口戦略を考慮して活動しているとは言えないが、現地の人を育て、業務移管するという点では出口戦略の一端となっているのではないかと考える。最後に、国際協力の大切さは、団体としては啓発活動をおこない、個人的には講師活動を通して理解を促している。

渡辺氏：調査の段階から私たちはそこを去る立場であるということを念頭に置き、現地に何を残せるのかを考慮して活動している。出口戦略は明確なものはないが、住民が学びを共有し、移管可能だと判断した時に JVC はプロジェクト終了とする場合が多い。

16:25 セミナー協力団体よりご挨拶

独立行政法人 環境再生保全機構 齋木 雅恵氏

私たちは、NGO/NPO の環境保全活動に対して助成している団体である。1992 年にリオデジャネイロで開催された地球サミットと呼ばれている国連会議開を機に設立された。活動内容は、助成事業と NGO/NPO の組織運営ならびに人材育成を支援する振興事業の二本柱でおこなっている。

16:30 閉会